



消えゆく古城の神人

世界遺産に指定されたナシ族の古城。

守られるはずの民族文化は、観光化の波の中で大きく揺れていた。

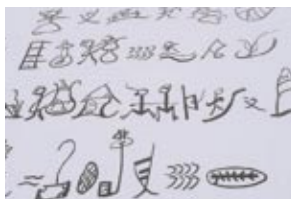
チベットから長江の源流を下り、雲南省西北部の麗江でナシ族のシャーマンと出会った。この地の土着信仰はトンパ教。今でも象形文字のお経を使うことで有名だ。

「死ぬのは自然のこと。雪山も年をとれば崩れる。金沙江も長江の上流もときには枯れる。古木は倒れる。だから人間が死ぬのも自然の理である。死んだら先祖たちが迎えに来ってくれるから、怖がらなくて旅立ちなさい」

シャーマンである侯国耀さん(32)の読むお経には、そのようなことが書いてあるらしい。輪廻転生はないということだが、やはり死生観にはチベット仏教の影響が残っている。

侯さんの持つ貴重な手書きの経文もさることながら、身につけた装飾品も面白い。右手の杖にぶら下がっているのは、鷹のツメ、鹿の角、ほら貝、野生の羊の角など、魔よけの品々。いかにも土俗的な雰囲気があつて良い。ただ今の中国ではシャーマンの出番は少なく、数もめっきり減つた。

侯さんもふだんは仕事がないため、麗江の近くにあるトンパ文化園という観光客目当ての



今も使われる象形文字・トンパ文字

麗江上……長江 を行く



怪しげな施設で日銭を稼いでいる。毎月200元ほどの収入になるという。これでは食べるだけで

精一杯。なり手がいないのも当然である。侯さん自身は子どももこのころ、いろいろのそばで父親からトンパ文字を習った。僧侶の修業はしていないものの、儀式を仕切ることができない。

「ここにいると村で葬式があってもなかなか連絡がとれない。携帯電話があったら、もっと仕事をこなせるのにね」
最近はずっとでも携帯電話を持つ坊

さんは多い。右手に携帯、左手に经文という時代なのである。ここでは神もハイテク機器も象形文字も「こちゃこちゃ」に混じり合っている。

伝統を愛する侯さんには、麗江の変わりようも嘆かわしい。この街は97年に世界遺産に指定されて以来、すさまじい勢いで観光資本が流入し、ナシ族特有の町並みや風俗をことごとく見せ物にしてしまった。優れた歌舞や芸能も観光客から力ネをむしりとる道具として扱われている。

野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」料と絆 など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

関係です」と言った。男は遊びが好きでナシ族は今も昔も働き者の女が支えているという。

ただし、男の遊びの中身は変わった。かつてナシ族の男のたしなみは、琴棋(囲碁など)、書、画、タバコ、酒、茶といわれた。それが今は食べる、飲む、打(博打)、買(売春)の四つになった。

「いつの時代もホントに男はあてになりませんね。神様もあきれているに違いないですね」

そう言いながら、侯さんは雑踏の中でチャリンと杖を振った。忙しく行きかう人々は誰もその音に気をとめることはなかったのである。

「私たちは商売がヘタです。観光で儲けているのはよそから来た漢民族ばかり」と地元民は憤る。昔の風情を残す古城地区では、道路に面した一階部分はすべてみやげ物屋となっていました。物価が高くなったため、家を手放し、古城を離れる人も少なくない。麗江は世界遺産に指定されたために、民族文化が危機に陥るという皮肉な事例になるかもしれない。侯さんはそんな街を案内しながら、「だけどね……変わらないものもある」と息をつぎ、「……それはナシ族の男と女の

